

## 「これでいいのだ」と思える医療

オリンピックで優勝するようなトップ・アスリートは、競技の種目に関係なく体の重心移動が優れているようだ。重心とは「物体の各部分に働く重力の合力が作用すると考えられる点」(広辞苑)と定義されており、人間の体に安定やバランスをもたらしている。

私の勤務する病院にも重心があるが、こちらは重症心身障害児(略して重心)病棟のことであり、その動向が職員の意識や病院全体の経営にも大きく影響する点では、体の重心と同じである。脳性麻痺などの重症児の罹患率は人口1万人あたり約3人前後であり、現在全国に4万人弱の患者がいると推定されている。

昭和30年代までは、障害が重く社会復帰できない者は“法の谷間”におかれ、国の福祉が及ばなかった。そんな状況の中で、全国重症心身障害児(者)を守る会では「もっとも弱いものをめれなく守る」という基本理念のもとに、重症児への理解を深め共感を得られる運動を展開してきた。その後、全国の国立療養所に重症児病棟が次々と開設され、さまざまな社会福祉施策が実施されてきたが、人員配置の充実や在宅支援への取り組みなど、残された課題も多い。

医療の中には救命救急や臓器移植などの「治す医療」もある一方で、緩和ケアや在宅での看取りなど「支える医療」もある。当院の重心病棟で行っているのはまさにこの「患者さんや家族を支える医療」なのだが、ここでも医師不足が深刻化している。しかし現状を嘆くばかりではなく将来の重症児医療を担う人材を育てるため、当院では医学部1年生や看護学生に重心病棟で実習を行っている。医療を目指す若者が新鮮な感性で重症児と接する事はいかなる教育にも代え難い貴重な経験であり、障害に対する理解も深まると信じるからである。

重症児には生産性はないが人の愛を感じたらニッコリ笑い、その純粋な心や懸命に生きる姿には人の心を動かす力がある。

「私にできることは小さなこと。でもそれを感謝してできたら、きっと大きなことだ」  
(星野富弘)

進行性の病気や回復の望めない障害を持つ患者さんの診療においては、たとえ十分な満足は得られなくても深い納得感や自己肯定感を持てるような医療を目指したい。患者本人や家族が「これでいいのだ」と心から思えるなら、医療者としてそれ以上、何も望むものはない。

(2008年9月8日 下野新聞「しもつけ随想」)